

編集室から

夏本番を前に、すでにギブアップ気味です。記録的な短期間・少雨の梅雨が明け、連日の猛暑。というより酷暑の連続。走り出せば、車中は冷房が利き快適ですが、一旦駐車すると、また猛烈な気温になり、身体が慣れません。

熱中症対策には欠かせないものの電力需給も差し迫り、冷房は連続運転のままで良いのか、悩みながらの日々です。

能登半島の先端地区や、各地で地震・噴火なども発生しています。今のところ、大災害には至っていませんが、近々と予想されている南海・東南海地震も気になります。

自然界の異変だけでなく巷では、有り得ない・有ってはならない事件、不穏な動き。

東欧の紛争で、諸物価は上がり、暮らし周りも先行きが思わしくない…。

そんな暑苦しい世の中となっていますが、この流れは一体どうなっているのやらと、思ってしまう方も少なくないのではないのでしょうか。

快晴の空と白い雲だけを見ていると平和なのですが、人間社会の方はヒートアップしている先に何が待ち受けているのか。

今月の表紙写真は、地域再生のお手伝いをさせて頂いている大阪府島本町の山からの眺めです。下界は、酷暑でも600mほど登った峠では、涼しく、気持ちの晴れる光景が楽しめます。完全な自然林というわけではなく、植林された人工林の山ではありますが、それでも府下唯一の名水百選「離宮の水」の水源地として千年単位で守られている一帯は、別世界。

社会的動物と言われているニンゲンですが、集まり過ぎる弊害を避けた適度な分散居住と、自然と共に在る自立した暮らしを求めて田舎暮らしを始めようとする若者が、増えてきているのも、これからの時代のなにかを象徴しているかもしれません。心地よさが鍵かもです。(は)



のと
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち
03-5537-3078
17:00~23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27
プラーザ銀座ビル地下1階
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2022/08
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp



2022/08
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

葉 月



大阪府島本町
おおさか環状自然歩道にて
by hama

寄稿『揺れ動いた一ヶ月』

サンポート高松クリニック 井垣 俊郎

いつも前の月に書いた文章を読み返してから新たな月に取り掛かるのですが、たった一ヶ月前はこんなにもん気だったのかと驚かされました。それほど激しく揺れ動いた一ヶ月でした。

◎

まず七月早々に起きたのが、安倍元首相の殺害事件です。首相の座は退いたけれど、政界で最も影響力のある人物と誰もが認める存在です。白屋堂々、公衆の面前で、手製とは言え銃で射殺する、日本もここまで堕ちたかと衝撃を受けた方も多いでしょう。一匹狼が心の中で秘かに憎悪を募らせ、異様なまでに冷静な計算を巡らし、合法的に入手できる手段を用いて突然の凶行に走る。これは、止めようがありません。逃げ場のない建物内でガソリンを撒いて放火するのも、走る電車の中で刃物を振り回すのも、同じような構造です。今の世の中に潜む心の闇の深さを改めて突きつけられた事件でした。



次に驚かされたのは、東京電力の旧経営陣四人

◎

濱の起業塾 四十『出口戦略④』

一般的に、モノの流通経路は、生産地・産地側商社・消費地側商社・卸・小売店舗を経て、消費者へと渡っていく。

このルートの最終的な出口にいる消費者が「欲しい」と感じるモノしか、流れていかない。消費者の欲求を知り、それに基づいて作られているモノだけが「売れる」。

ニーズは必要性のことだ。「今の時代、携帯電話は『必要』だ」というのは、ニーズの話をしている。一方、「どんな携帯電話が『欲しい』のか」という話題は、ウォンツの話をしている。

ニーズとは、欲求としても、物理的にも、具体的に明らかになっているものであり、誰うでも分かりやすいから競争に晒されている。

逆にウォンツは、消費者自身にも明確なものとしては捉えられておらず、言語化もされていない。いくら客に尋ねても明確な答えは得られず、あいまい

に対して十三兆円の損害賠償支払いを命じた判決です。過失の有無はさておき、このような巨額の賠償を個人に求める意味があるのでしょいか。むしろ会社経営のリスクを過剰に意識させることで、リーダーとなるべき人を萎縮させたり報酬を非常識なレベルまで高騰させたりする原因になりかねません。控訴審や最高裁の判断を待つ必要はありますが、責任は個人だけでなく会社にも社会にも政治にもあるはずです。

◎

線状降水帯という言葉も、もう慣れてしまいました。記録的な暑さとカウ梅雨の六月から、七月に入ると一転して局地的な豪雨に見舞われました。東北・広島・佐賀・愛媛と河川の氾濫があつたものの、新聞の一面記事ではなくなりました。地球温暖化対策は、たとえ何があろうとも粛々と進めなければならぬのですが・・・。

◎

そしてトドメが第七波です。感染拡大に対して、もはや終息へのシナリオは崩壊しています。専門家も政府も、場当たりの対策しか持ち合わせていません。ワクチンは、何回接種しても重症化予防にしかありません。それも完璧ではなく、感染者が増えれば一定の割合で重症者も必ず増えてきます。若い人でも稀に重症化することから、加齢だけでなく個人の先天的な要素も重症化に関連するのだらうと考えられています。



【プロフィール】
（いいがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とっても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又クヌクしています。

なままだ。ところが、一旦ピンと来るものに出会った瞬間に「あーそれ！欲しかったんだ」と眠っていた欲求が喚起（思い出）されるものだ。

従って、「ニーズを探せ」と号令しているようでは、ままならない。誰も明確になっていない欲求を掘り当てて、モノとして見せ（魅せ）なければならぬ。

長く、この役目は消費者に使い側の流通に携わる人々が担ってきた。その方の指示により、生産側が指示通りのものづくりを担ってきた。だから、生産側は、常に誰かが「売れる」と言っているものを作るしかなかく、利幅を他所者に握られ続けてきた原因の根源は、ここにある。

多様化しつつある今日、消費者側の人々も何が売れるかが見通しづらく迷い始めている。そういう時代だからこそ、またネットを通じて直接的に生産側も消費者のウォンツを掴み、主体的にモノづくりができる環境が整ってきたことも、生産側に有利に働いている。あとは、チャンスをつかもうとする意思の問題だらう。

きただより90 弘前大学 地域社会研究会 上村 康之 『 地方行政が整備することとは？ 』

秋田市では、秋田県と秋田市は合同で「あきた芸術劇場ミルハス」が本年の6月22日に旧県民会館跡地に会館した。本格的な利用は9月26日に開始する。これに先立ち、秋田県民会館（1961～）は閉館、秋田市文化会館（1980～）も9月に閉館する予定となっている。人口減少や施設の老朽化に対応した公共施設の統合である。

青森市では、青森県立中央病院と青森市民病院の統合により、新たな場所（青森操車場跡地・青い森セントラルパーク）に2022年2月に県と市で病院を共同経営する方針で合意した。こちら、人口減少や施設の老朽化が原因であるが、最新の医療施設への対応、医療スタッフの確保もあげられよう。

効率的な運営に見えるが本当であろうか。秋田市では2つの会館が1つになるということで、すなわち主に住民などによる発表団体がミルハスで公演する機会が非常に厳しくなる。例えば、合唱や吹奏楽などの音楽サークルの場合、それぞれにコンクールがあり、コンサートを開催したい時期がほぼ特定の期間に集中する。特に中学、高校、大学といった学校の利用が多いため、さらに週末に限られる。また、「ミルハス」は大ホール（席数2,007人）と中ホール（席数800人）があるが、大ホールだと大きすぎ、中ホールは演劇・舞台などの専用ホールと言われている。「ミルハス」周辺の秋田駅前には県の財団による「アトリオン音楽ホール」（席数700人）がある。わが国有数のパイプオルガンもあり、本格的なプロの演奏家によるコンサートが多いことや、賃料も高いことからそれらの発表団体にするところこの利用はほぼ想定できない。もう一つ、「にぎわい交流館AU（あう）」の多目的ホールは300人が収容できるが、音楽のコンサートにはあまり向いていないように思う（全くの私見）。

一方、青森市の病院の立地であるが、県の病院は市東部地区の拠点ともいえる地点であり、現在の両病院とも各バス路線の重要な発着所となっている。統合による病院が、新たな場所に立地することは青森市のまちづくり、住民の病院利用行動からしても大きな問題である。恐らくこれに伴い、30年も前から市のプランに載っていた「（旧）青森操車場跡地駅」（現在は青い森鉄道）に新設という運びになるであろうし、近年大幅に路線と本数が縮小したバス路線の再編が加速すると想定される。

秋田市と青森市の公共施設の統合による問題点を若干指摘したが、このような問題はおよそ他地方でも起きているのではないと思う。

もう1点、気になっているのは、全国各地にみられるサッカー場の新規立地、あるいは拡張である。Jリーグ規約ではホームスタジアムの収容人数規定がJ1で1万5,000人以上、J2で1万人以上、J3で5,000人以上のようである。これは大都市圏でも地方圏でも同じようであり、これらを一律の基準でみるのはそもそも問題である。秋田市にはJ2のチームがあるが、秋田市の人口は約30万人、秋田県の人口は約93万人でしかない。試合が年間でJ2の試合が21、天皇杯の予選が1か2。2021年の平均観客数は2,097人（J2の試合）である。秋田市でもスタジアム建設の問題がある。関係者の努力には敬服するが、ほぼ行政の施設整備の方針に委ねている。結局は行政が赤字の補填、将来に向けた維持管理による公費の支出という流れになることが多いと思う。何とか、都市規模にあったスタジアム整備に、Jリーグ規約を変えるべきなのではないか。

『 ゲームが子どもの知能を伸ばす① 』 株式会社GARBAGE代表 川畠 嘉浩

史上最速の梅雨明けとともに、オミクロン株BA5も怒涛の感染拡大となり東京では新規感染者数が1日当たり3万人超が日常になってきました。より感染力の高いBA2.75も市中感染事例が始まったとのことで、果たして終わりは来るのか?とどんよりした気分になってしまうこの頃です。

かくいう川畠家も流行りにのってしまい、7月半ばに息子に陽性反応が出てから家族4人罹患となってまいりました。症状は軽くほぼ2日くらいでみんな元気になったのですが、発症から10日間は自宅から出ることができず、それが一番こたえました。そんな中元気を持て余す子ども達が没頭したのが「マイクラフト」というゲームです。

マイクラフトはスウェーデンのストックホルムに本拠を置くMojang社が開発したゲームでブロックでつくられた世界の中でアバターをつくり、その世界に存在する材料を集めて建物を建てたり、武器を生成してサバイバルをしたりと自分でプログラミングして新しい仕組みを作りだしたりと、これ小学生がやるゲームなの?という代物です。ちなみにデンマークやイギリスでは国家機関が自国の領土を再現したり、美術館を運営するTateが絵画の世界をテーマにしたワールドを制作するなど、『マイクラフト』を使ったユニークな試みが行われているようです。また、国内外の教育機関では「教材」として注目を集めており、実際に海外の学校では科目として採用している所もあります。国内においても少数ながらも特別授業などが実施されており、本来コロナ感染をしていないければ私と息子で東工大で開催された“マイクラフトで学ぶ世界”に参加する予定でした。

そんなマイクラフトがもたらす知能向上効果については以下のような点があげられています。※読売新聞記事から一部抜粋

1.問題解決能力の向上

プレイヤーの分身となるキャラクターが何も持たない状態で世界に投げ出され、そこから試行錯誤をしながら生活していくというもの。チュートリアルである程度の指針は提示されるものの、基本的には自分で考えて行動しなければならず、遭遇する諸問題に対して自分なりの解決策で対応していきます。例えば、夜にはモンスターが出現するため安全を確保することが必要になります。その解決方法は様々です。木を伐採して木材を入手し家を建てたり、山の斜面に横穴を掘って仮住まいにしたり、単純に地面に穴を掘ってその中で夜をやり過ごしたりと、今の自分の状況や考え方によって人それぞれのアプローチが出来ます。マイクラフトではこのような出来事が次々と起こり、プレイヤーは「問題を解決」あるいは「目標を達成」するために試行錯誤を繰り返します。（つづく）

翌日は馬路村に向かった。全国まちづくり交流会に出席するためだ。交流会の案内には「第5回は高知県馬路村、人口1,114人の小さな山村「ゆずの森」で少々不便も体験しながら「村には価値が生まれる」をテーマに大交流会をおこないました。あれから15年、人口は300人少なくなりましたが、村はまだ元気があります。第17回が飯館村で開催されてる3年を迎えました。長かった3年間、その間に開催を楽しみにしていた足助の小澤庄一さんが他界されました。本交流会の立ち上げや町づくりに尽力された若き姿を思い起こします。さて今回の交流会は「日本にはまだ村がある」をテーマとして、背伸びせず暮らす馬路村を見ていただきます。」とあった。

馬路村と言えば「ゆずの村」として名を馳せるようになっている。かつては97%が山、その3/4が国有林で2つの営林署があり3500人もの人が働いていた。今は730人が人口だから様相は相当違う。木材を運び出す森林鉄道が走り全長250kmにも及んだ。主要駅そばの線路には住宅や店が立ち並び、材木だけでなく命の保証はない条件付きで人や物資が運ばれた。その後、自動車の普及が始まり昭和38年のダムの建設共に森林鉄道は姿を消した。

林業の衰退が進む中、後に農協の組合長になる東谷望史が職員となり柚子の栽培を推奨、当初は青果で売っていたが、農家の高齢化が進み手入れが行き届かず見栄えが悪くなると商品価値が下がる。また、豊作になれば値崩れする。ならば加工品に転換することを東谷は提案。事業資金を持ち前の情熱・熱意で国から引き出し、加工品を生産し商品化したが、世にまだ柚子の加工商品がない中、売込みには苦労する。

當時を振り返り東谷は「関西や東京の百貨店で物産展があれば積極的に出張販売しました。村で加工品をトラックに積み、自分で運転する。時にはフェリーを使って。百貨店に着くと会場で商品を陳列し、夜まで販売員。飛びように売れたこともありましたが、なかなかうまくいきませんでした。これが農協の仕事なのか。歳を取る前に、体力まかせではない販売の仕組みを作ろうと誓いました。80年から顧客リストをコツコツと積み上げ、注文書を郵送する通販を始めました。同じころ、日本の輸送業界で宅配便サービス競争が広がりました。個人宅に荷物を届けるだけでなく、村まで集荷に来てくれる。これが追い風になりました。



通販による産直ビジネスを切り開いた農協へ、全国から視察団や消費者が訪れ、村の観光振興にも寄与しました。多くの人に出会い、村にしながら全国の情報に触れることができました。情報の発信の仕方も学べました。そして今、化粧品を含め馬路村農協のゆず加工品は現在約80品あります。」と語る。このことが、漫画でわかる中芸地域の柚子、全国へ「森林鉄道から日本一の柚子ロードへ」の冊子に書かれている。

話に聞く馬路村農協を見ることがこの村を訪ねる一番の目的だった。雑木林の中に「ゆずの森加工場」があった。黒川温泉の後藤さんに「雑木林をつくれよ」とのアドバイスから山から樹を持ってきて職員でつくったと言う。今では林の中に建築したのではと思わせるまでになっている。このことは湯布院で言えば玉の湯がそうだ。後に他の宿もそうしている。

中に入ると土曜日というのに事務室内にはそこそこの職員がいる。ここはコールセンターだったのだ。今どきは沖縄や青森であったり、その会社ここにあると思うような場所にあったりする。そうしないのは、ここは農協の商品だけについて答えているのではなく、「馬路村へ行きたいけど、泊まる場所は？」など観光の問合せにも答えている。となれば現地にいて地元のことがわかっている人がとなる。コールセンターは観光案内の機能も持っている。

人口730人の村に90人の農協職員。「観光のことは観光協会にとか役場に訊いてください」なんて言っている場合ではない。総出で対応、これが小さな村の面白さでもある。

2階のガラス越しに見えるは「ごっくん馬路村」の瓶への充填から箱詰め生産工程。さらには柚子の加工の歴史がわかる展示がある。

何より目を惹いたのは「デザイン室」である。ここのパンフ、ポスター、商品パッケージあらゆるもののデザインが内製化されている。田舎を前面に押し出してくる。素朴な絵、土佐弁で攻めてくるコピー、風合いのある紙質に唸る。そして室内から見る大きなガラス窓の向こうには山々の木々。馬路農協のセンスにただただ頭が下がる。

このゆずの生産加工販売は40年の歴史を経て村の一大産業になった。農協の職員になりたくて他所から来るから独身寮もある。通勤もあるから高知県内で昼間人口が夜間人口よりも多くなっている。これに温泉、登山などの観光や夏には鮎釣りで賑わうことになっている。

最後に東谷は語る。「ポイントは日本のどこにでもあったような風景が大きく様変わりすることなく残っていて、そこに村人の暮らしが営まれていることです。ゆずの商品が全国に流通し村が知られたことで、観光地でもない村にぼつぼつとやってくる人が多くなっています」と。(高知県への旅：おわり)

